

# 原爆文学研究会報

第五四号

原爆文学研究会 二〇一八年二月

近代文学会パネル発表の視点から『原爆』を読む文化事典』を考える

二〇一七年秋の近代文学会で若手の研究者三人とパネル発表を行った。スピリチュアリティをめぐるそのパネルでは、木下光太氏が映画『モスラ』について原爆文学とベンヤミンの「神的暴力」に関連して分析されたのがまず印象に残った。モスラがはたして秩序を生成・破壊する「神的暴力」を象徴するものであるのかどうかは議論の分かれるところであるが、ここでは特撮映画のスペクタクル性が戦争の暴力と死者の鎮魂と相容れるのかについての興味深い主題が提起されている。

四方田犬彦は近著で、映画とテロリズムとの関係についてベンヤミンの「哀悼的想起」の概念に触れながら、スペクタクル性の排除をいかになすべきかと述べたが（『テロルと映画』）、こうした論点は、例えばブラيان・W・オールティズ『リトルボーイふたたび』の加害と被害のスペクタクル性についても重要な問いかけになると思われる。

死者の鎮魂については、同パネルで加島正浩氏が、荒俣宏の『帝都物語』を題材に、天皇を頂点とする秩序から逸脱する多様な死者の鎮魂の空間の可能性を示唆された。この点については、荒俣が、大谷光瑞の興亜空間の検討を通じてある種のユートピア空間の模索と大東亜共栄圏批判を試みていること、さらにその空間が、木下氏が述べられた『モスラ』のインファント島のユートピア性と戦後東南アジアの政治的文脈とも重なりうることに興味深い。この〈ユートピア的な空間と政治的な文脈との関係性〉という問いは二〇一七年十二月二十三日の原文研での『原爆』を読む文化事典』ワークショップで東琢磨・権赫泰・伊藤詔子の各氏がそれぞれ提起されたグローバルな視座での〈原爆〉表象（そうした視座における被害者の連帯の可能性）にもつながるからである。

ここで課題となるのは、「加害と被害の共犯」（川口隆行）の問題であり、さらに、そうした共犯の陥穽を逃れうるあらたな連帯・共同性の模索の可能性である。その観点から興味深いのは、同パネルで泉谷瞬氏の津村記久子をめぐる発表で提起された「完結しない身体性」「一度浮上しただけですぐに解体される関係性」の問題である。この観点は、田崎英明の「資本の要求する包摂された可塑性とは違うさまざまな感覚の対象を受け入れられるという魂の可塑性」（『ジェンダー・セクシャリティ』）という問題提起へとつながる。

そして、田崎が、映画が人間の生や運動から因果関係や力学性を追放し一種の「例外状況」（アガンベン）を作り上げたとする、重大な指摘を同書で行っていることも考えあわせるとき、われわれは最初の映画のスペクタクル性をめぐる問題圏にたちもどることとなる。すなわち映画というジャンルそれ自体に最悪の政治的帰結へと導かれうる「可塑性」が原理的に孕まれているのであり、これはイマージュに依拠せざるを得ない原爆文学の領域においても看過できない問いである。イマージュの「可塑性」は果たして歴史と政治を、そして鎮魂をどのように表象しているのか。ここには、〈原爆〉表象をめぐる巨大な問いが横たわっている。

（柳瀬善治）

## 第五四回 原爆文学研究会報告

二〇一七年十二月二十三日（土）、広島大学東千田キャンパスにて第五四回研究会を開催しました。齊藤一氏の研究発表については多数の質問が寄せられました。スペンダーと広島島の関わりについて、一九五八年五月の



講演の招聘基金はどこから出ていたのか、同年に開催された広島復興大博覧会との関わりがあるのかという質問がありました。これに対し、齋藤氏からは、『ステイヴン・スペンダー日記1939—1983』（彩流社、二〇〇二年）が紹介され、そこに復興博への記述がないことが示されました。招聘元に関しては広島大学およびブリティッシュ・カウンシル、日本ペンクラブが関与している可能性が高いという応答がありました。また、「河辺のテントは破れ」と基町バラックの風景の関連、情事の間としての「河辺」と「ヒロシマ・モナムール」のロケとの関わりはないのかという質問もありました。これには、現在関連性があると断定はできないとされましたが、今後の課題とするという応答がなされました。

また、戦後すぐに東京と京都と広島にできたアメリカン・センターが招聘に積極的であったということとスペンダーの講演の関連や、広島のアメリカーン・センターについて参加者の実体験も交えた多彩な議論が交わされました。

刊行記念ワークショップ『「原爆」を読む文化事典』を読む』では、まず司会の中野和典氏から刊行の経緯が語られました。その後、東琢磨氏、権赫泰氏、伊

藤詔子氏から書評をいただき、編者の川口隆行氏からリプライがありました。

東氏の映像やテレビドキュメンタリーへの取り組みの必要性という指摘に対して、川口氏は文学を出発点とした「原爆文学研究会」の射程の限界への自覚と、今後の展開への課題を示されました。

また、三、一一以降の問題に触発されて再始動したこの事典が、それ以前と以後との核の語られ方の変容を浮き彫りにするべきではなかったかという権氏の問題提起への応答として、川口氏からは冷戦の問題と冷戦後のアジアの継続中の問題が項目として精緻に立てられていないという点への反省が述べられました。ただし、「朝鮮半島と核危機」のように事典編集集中に推移していった情勢を可視化することについての執筆者・編集者の努力があつたことにも触れられました。

伊藤氏の感想表明を受けて、川口氏からは事典の編集方針についての説明がありました。あえて人名を項目に立てず、事典のネットワーク性の中で重要な人物に言及していくという方針をとつたこと、また国名を掲げるような項目についても「国によってこうだ」という問題に矮小化されないよう慎重を期したことが語られました。

総合討論では、項目に取り上げられていない問題への意識についてや序文の文言についての質問があり、そのほかさまざまな視点から活発な議論が展開されました。

#### ◇ 研究発表

ヒロシマの「荒地」―ステイヴン・スペンダーの広島講演会（一九五八年）を中心に

齋藤 一

イギリスの詩人・批評家・編集者、ステイヴン・スペンダー（一九



○九年（一九九五年）が、ビキニ事件への応答として出版された『死の灰詩集』（一九五四年）をめぐる論争に関わったことは、野坂昭雄がすでに指摘している（『〈原爆〉を読む文化事典』（二〇一七年）を参照）。この論争の延長線上に、スペンダーの広島大学東千田キャンパスでの講演 "Problems of Modern Poetry"（一九五八年五月）を位置づけることができる。

この講演の要点は以下の通りである。第一に、現代詩の問題とは、原爆（のような巨大な破壊）による過去と現在の断絶といかに向き合うかということである。第二に、日本では原爆やビキニ事件について数百の詩が書かれているというが、私（スペンダー）は一つも読んだことがない（これは嘘か事実誤認で、安藤一郎によれば一九五四年にスペンダーは『死の灰詩集』収録の詩二あるいは三編「英訳」は読んでおり、その中には堀口大蔵「死の水曜日」「英訳タイトル"Ash Wednesday"もあった）、それはジャーナリズム的、時節に乗じたものではないか。第三に、現代詩においては、過去と現在の結合が必要である（T・S・エリオット「伝統と個人の才能」（一九一九年）の影響は明らかである）。スペンダーの講演の後半は、第三点の具体例として、エリオット『荒地』第三部「火の説教」冒頭部の解説になっている。この冒頭部は、ロンドンのテムズ川の「河辺のテントは破れ」（スペンダーはこの箇所を引用する際に太田川と原爆ドームを意識していたと私は考えているが、この仮説についてはフロアから様々な指摘があった）から始まるが、二〇世紀の「河辺」が男女の情事の場合になったことと、一六世紀の詩人エドモンド・スペンサーによる王侯貴族の「河辺」での婚礼を賛美する詩の引用が対比されることで、過去から現在への頹落の表現になっている。ここにスペンダーは「過去と現在の結合」を読み取っているの

だが、彼は単にエリオットの偉大さを強調しただけではなく、日本の原爆詩もこうあるべきだと訴えたかったのだろう。

この講演に応答した一人が大原三八雄である。同人誌『ぶれるうど』第一四号（一九五八年八月）において、大原は、原爆詩は過去と現在だけではなく未来への視点が必要だと訴えていたのである。

スペンダーの詩学と大原のそれとの対立には私たちにとつてどのような意味があるのかについて、さらに考察を深めていきたい。

◇ 刊行記念ワークショップ『〈原爆〉を読む文化事典』を読む

## 川口隆行編『〈原爆〉を読む文化事典』によせて

東 琢磨



『〈原爆〉を読む文化事典』の刊行は現時点において、非常に意味のあるものとらえている。今後のさまざまな文化活動の武器として、あるいは武器庫として有効なものとして歓迎すべきだ。この「事典」には、さまざまな事項・人名が出てくるが、同時にこれは、多くの執筆者の方々の名鑑であり名刺代わりのものとしても機能する

だろう。

「読む」事典」という性格上、すべてをきちんと見通すことは困難だが、いくつかのフレーズを引用することで、雑駁なコメントとさせていたきたい。

まず、中野和典は、深川宗俊による「今後まじめな批評活動が、相違する立場をも尊重しあう謙虚さをもってより具体的におこなわれるなら

ば、私たちの文学運動はさらに一歩すすんだかたちにおいてうけとめられるだろう」という発言を引いておられる(「原爆文学論争」)。これは、過去の「論争」におけるコメントであるだけでなく、今回の「事典」刊行にあわせて、今からの状況にも重ねることができよう。さきに、「武器庫」という比喩をあげたが、今後の武器庫の充実に向けてのスタンスともなってくるはずだ。

そうした意味でも、松永京子による「先住民権利運動」という項目が『「原爆」を読む文化事典』のなかに設けられたことの意味は小さくないと考える。ある作品についてふれながら松永はこのように書く。「本小説の核心ともいえるウイグル族が受けた被害の詳細が、「わざわざソグド文字現代ウイグル語で秘密めかしく」書かれている事実は、少数民族や先住民が核被害を言語化する際に伴うリスクを示唆すると同時に、文字にされながらも読まれることがなかった物語、あるいは文字にさえされてこなかった物語の存在を暗示しているといえるだろう」。

この部分は、仏語圏(植民地)カリブのマルティニク出身の作家・思想家エドゥアール・グリッサンによる「われわれは不透明性への権利を主張する」という宣言をも、私などは想起するものだ。私たちは、権力や統治体に対しては「透明性」を要求し続けなければならないが、同時に、自らを守るためには、強者からの要求に対して「不透明性」を確保しなければならないということだと理解している。「ヒロシマ」は、「核の被害」を広く知らせるために自らを開くことに専心してきたが、「(他者が、あるいは自らも)わかることができない」ことの意味にも今一度帰ってみる必要があるのかもしれない。それは、無言の死者、あるいは、認知症の果てに語りだされたものといって、了解不可能性のようなものを守りつつ伝えるということであるかもしれない。

村上陽子は「幽霊」の項目でこのように記している。「しかし幽霊が与えることができるのは、いわば死者に捧げられる生である。原爆の記憶とともに痛みに満ちた生を生きよという厳命は、生者をどうしようも

なく縛り付け、生を諦めることを許さない」。その「生」とは、以下のようなベクトルのものでもありうる。「むしろ大事なのは、「帝国に追放されし者」との連帯の(不)可能性を探ること、あるいは自分たち自身が「帝国に追放されし者」である／になる可能性を想像することにあるだろう。(川口隆行、「原爆スラム」の項目)。

この『事典』から始まる動きには大きな期待を寄せてしまいが、最後に、具体的な提言として、「映像」への取り組みの強化、特にテレビドキュメンタリーの「資料」としての取り組みを呼びかけておきたい。書くことがなかった多くの人びとの声も、表情とともに写し止められている重要性を持ったものとして評価しなければならない。にもかかわらず、なかなか反復して、また皮肉なことにパブリックに見ることができない状況にある。こうした状況へのアプローチにも期待したいと思う。

## ◇ 刊行記念ワークショップ『「原爆」を読む文化事典』を読む』 なぜ今時「原爆論」を問題にせねばならぬ いのか

権 赫泰



『「原爆」を読む文化事典』(以下、『原爆事典』と略す)は事典、すなわち「ことてん」という題にふさわしく、原爆にかかわるあらゆる出来事を「網羅」している。実に70項目の出来事を30人にも及ぶ専門家が密度の高い解説や分析を加えている。これだけ多くの筆者がそれぞれの項目に独自

の批評を行っているので、原爆の描き方にいささか偏差が見られるのはやむをえないが、しかしその偏差を短所でなく長所として浮かび上がらせる工夫が施されていることも忘れてはならない。すなわちこれまでほとんど注目されてこなかった項目などを精緻に選んで配置していることである。また『原爆事典』は厳密に言えば、原爆そのものより、「原爆を読む」を「読み直す」といったほうが確かもされない。すなわち、原爆の表象論の再分析であるという意味で、原爆を表象してきた時空間を問題にしていると理解すれば、その時空間である日本の「戦後」を再分析しているといっている。だとすれば、二〇一七年の時点で原爆にかかわる事象を「網羅」し再分析する理由はどこにあったのか。ひとつは、これまでの原爆論や原爆論を構成していた多くの事象で欠落・捨象されていた問題をいかに批判的・省察的に包括しているか、いまひとつは、二〇一七年という時空間がこれまで「原爆論」を主導していた「戦後」といかなる意味で異っていると解釈しているのかを期待せざるを得ない。なぜか言うと、福島原発事故（二〇一一年）と朝鮮の核疑惑という二つの大事な画期があるからだ。すなわち、広島・長崎の経験にもかかわらず（あるいはその経験があつたがゆえに？）福島事故はなぜ起こつたのか、広島・長崎の経験にもかかわらず（あるいはその経験があつたがゆえに？）、朝鮮をはじめとするアジアの国々はなぜ核開発に走つていくのか。この二つの出来事と問題意識が『原爆事典』全体に貫かれているのか、具体的にはこの二つの出来事を画期とし、その前後に原爆論にどのような変化が見られるのかを意識しているのが核心の問題であるが、その核心問題をもうちょっと積極的に前面にうち立ててもよかつたのではないかと思う。最後にこれだけ膨大な内容と多様な主題をもつた書物を多くの人の共著で出版できたことに敬意を表したい。限られた

原爆論しか流通していない韓国でハングルで書かれた原爆論を『原爆事典』の形で出版する日がやってくることを期待したい。

◇ 刊行記念ワークショップ「『原爆』を読む文化事典」を読む」

## エコクリティシズムとアメリカ文学研究の 観点からのコメント

伊藤 詔子



本書はまえがきで、原爆のみならず核も視野に入れた包括的な「原爆を読む」文化事典を目指したとあり、代表的出来事、論争、表象の歴史が、4部構成70項目にわたる紹介・議論され、時に鋭意分析された充実した事典になっている。特に各項目の参考文献も有益で、ほとんどの言説も歴史的によく整理され、客観的記述で構成されており、今後原爆と文学・文化を幅広く考える際必携のガイドブックとなる。また膨大な仕事を编者一人の力技でまとめてあり、趣旨と手法の一貫性があり、多くの論者がいながら一冊の研究書の高品質も備えたもので、必ずや座右の書になっていくと思われる。原爆文学研究会のこれまでの努力の結果として、まずは编者、著者の方々の労を多としたい。

そのうえで特に本書タイトルが原爆文学ではなく「原爆を読む」となつて、幅広い文化論の観点を内包することから、世界の核化が進行し、核実験による健康被害と核の危機がグローバル化している現在、扱うべき新たな項目も考えられる。アメリカと台湾の言説が、周辺的問題として置いてあるが、全体的にはやや情報不足の感があるので、このような項目もあつたら、さらにはこのような記述もあつたらといった提言を以

下の順で感想として述べた。

- I. 21世紀核批評におけるヒロシマ、ナガサキのプレゼンスの拡大
  - II. 事典にあってもよかった項目 (1) Hibakusha (英語表記)
  - (2) Obama Hiroshima Speech (3) アメリカの反核運動 (4) アメリカの核の場所の文学 (5) 世界の核文学
  - III. 各項目の記述内容について特に印象的な点と捕捉すべき点について述べた。
  - IV. 核をテーマとするアメリカ文学と英米語圏の核批評について
- 拙論"American Nuclear Literature on Hiroshima and Nagasaki" (Oxford Research Encyclopedia of American Literature. 2017, Oxford UP, web dictionary) の書誌を中心に、英語圏における原爆に関わる文学、核の場所の文学と、核批評の研究現状を97点の書誌で説明した。
- 資料としてアメリカの「核の場所」「ウラン廃坑核汚染地帯」「原発高濃度核廃棄物処理場」の地図を添付した。

## 彙報

第五四回 原爆文学研究会

○日時 二〇一七年十二月二十三日(土)

○会場 広島大学東千田キャンパス東千田校舎A棟二〇七講義室

○研究発表 ヒロシマの「荒地」―スティーブン・スペンダーの広島講演会(一九五八年)を中心に 齋藤一

○刊行記念ワークショップ『「原爆」を読む文化事典』を読む

書評 東琢磨・権赫泰・伊藤詔子

リプライ 川口隆行

司会 中野和典

## 機関誌 「原爆文学研究」 第一七号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一七号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿ください。

○書 式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一八年

九月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付し

ての投稿の場合は同年九月三〇日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 千六五一―二一八七 神戸市外国語大学 山本昭宏研究室

神戸市西区学園東町九一―

## 編集後記

第五四回原爆文学研究会は約六十人の来場者を迎え、大盛況のうちに終了いたしました。第五四回原爆文学研究会での報告内容をお寄せいただいた報告者のみなさん、巻頭エッセイをご執筆いただいた柳瀬善治さんに心よりお礼申し上げます。

次回の第五五回原爆文学研究会は三月二十四日(土)、二十五日(日)の二日間にわたり、長崎大学環境科学部大会議室にて開催されます。会員のみなさまのご参加をお待ちしております。

(村上陽子)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>